

課外授業「観光英語」の開発とその実践

中山 晃¹⁾, 寺嶋 健史²⁾, 川畑 由美子³⁾

1) 愛媛大学教育・学生支援機構英語教育センター

2) 松山大学人文学部

3) 河原学園専門学校エアライン・観光科

Developing the Extra-Curricular Course of “English for Tourism” and its Practice

Akira NAKAYAMA, Takeshi TERASHIMA, Yumiko KAWABATA

1) English Education Center, Institute for Education and Student Support, Ehime University

2) Faculty of Humanities, Matsuyama University

3) Department of Airline & Tourism, Kawahara Gakuen

はじめに

米国など英語が日常的に使用されている環境での英語学習とは異なり、わが国のように英語を学ぶ目的が希薄となりがちな「外国語としての英語学習環境」において、明確な目的と使用場面を設定したプロジェクト型の授業は、グローバル人材育成の一側面となる語学力の向上に期待できる英語の指導法である。一方で、現実離れた設定を用いたプロジェクト型の授業では、学生の興味・関心が深まらず、結局、教育効果という点で、十分な成果が得られないとの指摘がある。ここで言及する現実的な設定とは、例えば、日常生活や周辺のコミュニティ・環境など、学習者を取り巻く社会や文化的な文脈を指し、プロジェクト型英語教育は、これらの側面に、「教育」を足した複合的な要因によって、満たされるものであり、英語の4技能(Speaking, Listening, Writing, Reading)の統合という意味においても重要な要素である(中山, 2013)。

翻って、本稿が扱うプロジェクト型英語教育の背景と授業設定を概観してみると、観光資源が豊富な愛媛県において、松山市及び石鎚山周辺は観光スポットとしても有名であり、学生の身近な環境が状況の現実性・信憑性(authenticity)という点において、学習を促進しやすいと言える。また、近い将来、愛媛県内の観光資源の海外への発信、そして近年の地方における観光産業のキーワードとなっている「インバウンド観光」¹⁾の促進の一助となり

うる人材の育成という点で、地域社会への貢献にかかわる今日的な目標を併せ持っていると言える。すなわち、本稿で扱うプロジェクト型の授業(観光英語)の開発と実践は、本事業に参加した学生のさらなる英語学習への意欲につながるといった教育効果を期待できるだけでなく、地域の活性化を促進できるといった社会的効果も期待できるユニークな取り組みと言えよう。

以下、本稿では、一連の課外授業の詳細と実際の学生によるガイドの様子、さらに各種外部試験結果と課題、そして今後の発展について述べるものとする。

方 法

本稿のプロジェクトは、平成28年度「愛媛大学と松山大学との地域活性化促進連携事業」に採択された事業である。よって、この課外授業(観光英語)の開発に当たっては、その事業計画に基づき授業スケジュールと実地訓練、検定試験が組み込まれたので、その詳細を報告する。

(1) 参加学生

愛媛大学と松山大学との共同プロジェクトであることを踏まえ、平成28年度当初に両大学で説明会を行い、学生を募集することにした。参加希望人数を含め、どの程度の興味・関心があるのか、未知数であったが、事業予算の制約もあったので、両大学から5名ずつの合計10名を集めるこ

とを目的に説明会を実施した。しかしながら、実際には希望者が殺到し、当初の本プロジェクトへの登録学生数は、59名となった（愛媛大学から17名、松山大学から42名）。課外授業の日程が、基本的に土・日曜日ということもあり、また年間10回程度とは言え、平成28年度を通しての日程であったので、回を重ねるごとに、参加者は減少していった（表1）。最終的に、ガイド実践に参加できた学生数は、当初予定していた人数の2倍程度に収まった。

表1. 参加学生人数の推移

回	日付	トピック・内容	人数
説明会	5月13日(金)	合同説明会(愛媛大学・松山大学)	59名
第1回	6月18日(土)	オリエンテーション「観光英語とは？」	45名
第2回	7月23日(土)	松山城周辺の英語案内(プレゼン練習)	46名
第3回	8月6日(土)	道後温泉周辺の英語案内(トライアル)	37名
第4回	9月24日(土)	石鎚山周辺の案内(ロールプレイ)	14名
第5回	10月22日(土)	「観光英検*」直前対策・壮行会	21名
第6回	10月30日(日)	「観光英検」試験日	26名
第7回	11月4日(金)	ガイド実践(松山城周辺)	18名
第8回	11月7日(月)	ガイド実践(石鎚山周辺)	9名
第9回	2月14日(火)	TOEIC-SW試験	11名
第10回	3月10日(金)	観光ガイド報告発表会(発表者の人数)	3名

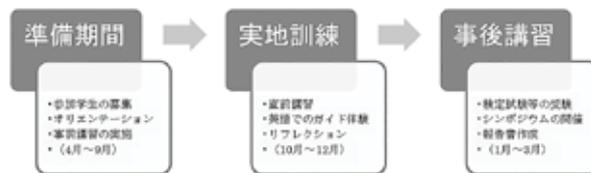
注) 観光英検：全国語学ビジネス観光教育協会が主催する検定試験であり、「観光英語検定試験」の略称

(2) 手順

平成28年度当初に、両大学の学生に募集を行った後に、観光英語に関する事前・事後講座（課外授業）を実施することにした（図1）。授業は、夏休みを含め前期4回、後期2回実施した。なお、後期には、実地訓練の場として、平成28年度中に開催される日米教育養成協議会（Japan-U.S. Teacher Education Consortium: JUSTEC2016）の会期中（平成28年11月4～7日）に設定されていた2つのオブショナル・ツアー（初日は松山城観光、最終日は石鎚山周辺観光）に両大学の学生を英語ガイドとして同行させ、特に海外からの参加者への愛媛県内の観光名所の案内を担当させることにした。

事前講習としては、英語でのガイド経験者等の現場経験者による講演の他、愛媛大学の教員による数回の課外授業を通して、万全の準備をした上で、オブショナル・ツアーへ参加させることにより、教育効果を高めるよう工夫した。その他、教育効果の測定をかねて、観光英語に関する英語検定と、産出系英語スキル（productive language skills）を測定する英語の試験（TOEIC-SW®）を受験させることにした。また、実地訓練後は、事後講習として、実地訓練参加報告会（シンポジウム）を開催し、本事業に参加した学生の経験談を、観光英語に興味のある両大学の学生ならびに教職員、さらには、地域の方々とともに共有し、本事業の成果を広く公表することにした。

11月の実地訓練（オブショナル・ツアーでのガイド）を見据えて事前講習に参加することで、具体的な目標を持った意識した学習を促進！



実地訓練の後には、リフレクションとして、事後講習の受講や英語の検定試験受験のほか、年度末のシンポジウムへの参加と体験記（報告書）の作成を通して、キャリア意識の向上へ！

図1. 実施計画の流れ

(3) 指導実施体制

本稿の第一筆者を事業の代表者として、合計3名の教員で行うことにした。

(4) 教材

本稿の第三筆者が作成した「Eigo de Guide in Ehime」(無料配布)を、使用することにした。

(5) 事前指導

愛媛県在住とは言え、両大学の学生の内、約4割弱は県外出身者であった上、地元の観光資源についてほとんど知らない学生も参加していたので、実際に実地訓練で訪れる観光地について、よく知っておく必要性があった。加えて、観光案内で使用される英語表現や観光ガイドとしての心構えなど、事前に学習すべき内容が多くあったので、事前指導内容を充実させることが肝心であった。

第1回養成講座

初回の事前講習では、両大学の学生が協働できるような体制づくりが肝心であると考え、教員側ですでに班分けを行っておくことにした（全10班）。講習内容としては、観光ガイドとしての心構えの他、松山城についての基本知識と観光英検の傾向と対策について学ぶことにした（図2を参照）。



図2. 第1回目講習の様子

第2回養成講座

2回目の事前講習では、各班で事前に調べて来た内容をプレゼンテーションする活動を行った。クイズ形式のプレゼンテーションから、トーク形式、さらには、ドラマ仕立ての形式での発表等、実に様々なスタイルで発表を行った。学生同士のピア評価を導入し、「①内容が豊かで情報が伝わる」、「②ガイドの態度がよく観光客への気配りができている」、「③全体的に英語力が高い」、「④グループ間で協力できている」、「⑤プレゼン方法に工夫がある」、「⑥周到に準備した跡がみられる」、「⑦発表の時間配分が適切である」の7項目を5段階評価し、かつ自由記述でのコメントを書かせることにした。自主的に集まった学生達なので、いずれのグループもしっかりと準備しており、発表内容が充実していた。当日の様子は図3のとおりである。

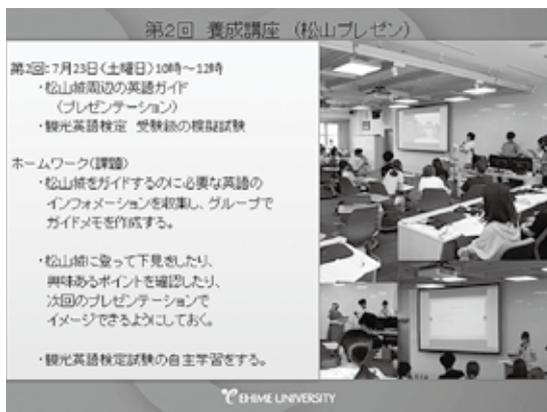


図3. 第2回目の講習の様子



図4. 第3回目の講習の様子

第3回養成講座

3回目の事前講習では、愛媛大学に通う留学生(10名)にボランティアとして協力を依頼し、仮想の旅行者となってもらった。留学生一人につき一班として組み合わせ、それぞれの班で準備してきたオリジナルの道後温泉周辺ガイド案を用いて、担当となった留学生を英語で案内することにした。留学生と触れ合う機会が少ないという現状もあり、最初は緊張した面持ちでガイド訓練に臨んでいたが、約1

時間半の道後周辺案内の終了間際には、楽しそうに英語を使って会話する様子が見えた(図4を参照)。

第4回及び第5回養成講座

4回目の事前講習では、石鎚山周辺に関するプレゼンテーションを行う活動を行った。石鎚山についてのいわれや、周辺に位置するお寺や神社について、丁寧な発表がなされた。当初は、松山周辺の観光資源について全く分からず、本講座に参加したものの、実際にガイドすることができるのか不安に感じていた学生も、調べ学習とグループでのプレゼンテーションを通して、自信をつけていくことができたように思われる(図5を参照)。

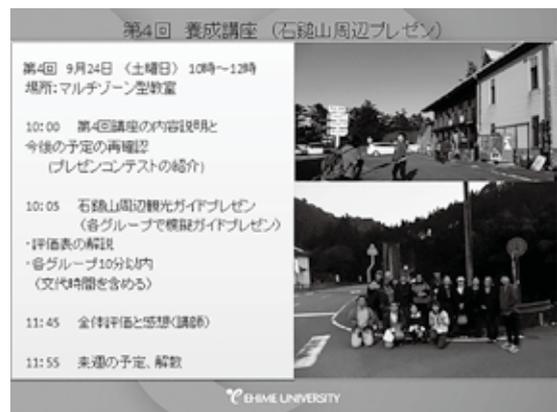


図5. 第4回目の講習の様子

翌月(10月)には第5回的事前講習として、壮行会と観光英語検定試験についての案内と直前講習を行った。なお、第5回講習と11月上旬の間となる10月30日に、参加学生は観光英検を受験しているが、その結果については、次章の後半でまとめて報告する。

結 果

(1) 実地訓練(英語でのガイド実践)

実地訓練は、11月4日(金)の松山城観光ガイドと、11月7日(月)の石鎚山周辺ガイドの合計2回行った。以下、それぞれの回ごとに、概要とガイドを受けたツアー参加者からの評価をまとめる。

松山城観光ガイド. 19名の学生ガイドと25名のツアー参加者が、愛媛大学正門で集合し、事前にマッチングしたグループでメンバーを確認後、集合写真を撮影し、ガイド開始となった。基本ルートとしては、愛媛大学正門から徒歩で、松山城ロープウェー乗り場まで移動し、松山城城山公園を抜けて松山城内見学、休憩を取ってから、同じルートを通して愛媛大学へ戻るといったものであった。道中は、学生ガイドが積極的に英語でコミュニケーションを図り、日本の大学生の学生生活やツアー参加者の興味のあることなど、松

山城の案内だけでなく、一般的な話題をすることで、無言となる時間を減らし、ツアー参加者とのラポートを築けるようにアドバイスしておいた。



図6. 松山城ガイドの様子

石鎚山周辺観光ガイド. 11名の学生ガイドと17名のツアー参加者が、愛媛大学正門で集合し、事前にマッチングしたグループでメンバーを確認し、使用する観光バスに乗り込んだ。基本ルートとしては、まず、久万高原町内の「道の駅」にて途中休憩（お土産購入）の後に、石鎚山土小屋遙拝殿、次に、面河溪の景色をバスの車窓から楽しみながら、岩屋寺へ行き、その後、道後温泉へと向かうものであった。松山城観光ガイドとは異なり、バス内で過ごす時間が多かったため、学生ガイドたちは、積極的に英語を使い、ツアー参加者とのコミュニケーションをとるようにしていた。

表2. ツアー参加者に行ったアンケートの項目

	質問項目
1	The tour guide was friendly and welcoming.
2	The tour guide was knowledgeable about Matsuyama Castle (e.g., buildings, history, food and services).
3	The tour guide answered my questions about Matsuyama.
4	The tour guide covered my area of interests.
5	The tour guide paced the tour well.
6	The tour positively influenced my ideas about Matsuyama Castle and/or left a positive impression of the castle.
7	Overall, I would rate the tour as: (Poor - Satisfactory - Good - Excellent)

学生ガイドへの評価. ガイド中の学生の様子及びオプション・ツアー参加者の満足度を測定するために、表2に示す質問項目をツアー客に回答してもらった。しかしながら、1～6番の項目については、すべて5段階評価で5をつけており、また、7番目の項目についても、全員がExcellentを選ぶという高評価をいただいた。それを裏付けるかのように、全体的に改善を要する内容について自由記述で求めたコメントにも、例えば、「Time - I needed more time to enjoy the new history and Matsuyama.」や「Have more time with our lovely hosts.」, 「I wish we had a little bit more time. I didn't feel rushed, but more time would have been nice.」等と書かれており、学生ガイドとの時間をもっと楽しめたかったという趣旨のコメントをたくさんいただいた。こうしたコメントからも、ガイドに参加した学生がとても良くガイド活動をこなしていた

様子がうかがえる。

(2) 各種試験結果

教育効果の測定には、「観光英検」と「TOEIC-SW®」を用いた。それぞれの実施日と受験者数、合格者数は、表3と表4の通りである。

観光英検の結果

観光英検に関しては、残念ながら、全員合格とはならなかったが、2級を受験した学生(20名)の内、過半数を超える12名の学生が合格となり、同英検を主催する全国語学ビジネス観光教育協会が示している出題内容(約5,000語の語彙力、適切な文法・構文の理解度と海外旅行・旅行サービスで接する基本的な知識、及び旅行業務で求められる基本的な知識の習得)程度の水準までの聴解力及び読解力を持っていることが分かった。

表3. 観光英検の受験者と合格者数

試験名	日付	受験者数	合格者数
観光英検2級	10月30日(日)	20名	12名
観光英検1級	10月30日(日)	5名	0名

TOEIC-SW®の結果

TOEIC-SW®については、検定試験のような任意の級に対する合格・不合格という結果が示されず、能力レベル別評価(Proficiency Level Descriptors)と呼ばれる基準によって、得点と質的な記述基準の2つで英語力が示されるので、その基準に従って結果を報告する。

全体の得点の範囲についてであるが、基本的に1～9の範囲でレベルが決められるが、発音とアクセントにかかわる評価は、1～3と狭い範囲で評価がなされる。またスピーキング(Speaking Section)については、1～8の範囲で、ライティング(Writing Section)については、1～9の範囲で評価がなされる。

参加学生の発音(Pronunciation Proficiency)に対する評価であるが、11名全員がレベル2と判定された。これは、「英文を音読する際、発音は全体的にわかりやすいが、些細なミスがある。」という結果であり、同時期に受験した一般の受験者(1,137名:2017年3月5日実施の公開試験)の約8割がこの範囲に収まっていることを考慮すると、参加学生が標準的な発音レベルの能力を有していることがわかる。

次に、イントネーションとアクセント(Intonation and Stress Level)に対する評価であるが、1名が最高レベルとなるレベル3と評価され、残りの10名がレベル2と評価された。レベル3とは、「英文を音読する際、イントネーションとアクセントが、とても効果的である。」という評価であり、レベル2の基準である「英文を音読する際、イ

ントネーションとアクセントが、ほとんどの場合効果的である。」という評価より卓越していることがわかる。こうしたレベルに到達している学生が参加していたということは、他の参加者に対しても刺激になることであり、また観光ガイドとして活躍する際の参考基準となる部分とも言えよう。

スピーキング (Speaking Proficiency) に関しては、3つのレベルに評価された。高評価となったレベル6に2名、順にレベル5が5名、そしてレベル4に4名という結果であった。レベル6の基準は、以下の通りである (TOEIC-SW®の公式HPより抜粋「能力レベル別評価の一覧表」)。

一般的に、レベル6に該当する受験者は、意見を述べたり、複雑な要求に対して、適切に応えることができる。しかしながら、少なくとも部分的に意見の根拠や説明が聞き手にとって不明瞭なことがある。これには、以下の理由が考えられる。

- ・話さなければならない時、発音がはっきりしない、またはイントネーションや強調すべき部分が不適切である
- ・文法に誤りがある
- ・使用できる語彙・語句の範囲が限られている

また、ほとんどの場合、質問に回答し、基本的な情報を提供することができる。しかしながら、しばしば内容は理解しにくい。書かれたものを読み上げる際の英語はわかりやすい。

このように、レベル6に到達した2名の学生については、複雑な要求に対して、適切な受け答えが可能であるとの評価がなされており、観光ガイドという言語タスクを考慮すると、このレベルへの到達が一定の目標となると思われる。なお、レベル4の評価基準には、冒頭部分で「意見を述べる、または複雑な要求に応えようとするが、うまくいかない。」(下線は筆者による)との記載があり、観光ガイドとして活動する際の参加要件となりうる基準と言える。

ライティング (Writing Proficiency) については、実際の観光ガイド活動において直接関係するパフォーマンス・スキルとは言いがたいが、観光地についての紹介文や解説文を英語で作成する際には必要となるスキルなので、その能力についても測定した。結果として、レベル6~7という比較的高評価の範囲に収まり、内訳として、レベル7に5名、レベル6に6名と評価された。レベル7の基準は、以下の通りである (出典は、前掲と同様)。

一般的に、レベル7に該当する受験者は、簡単な情報を提供する、質問をする、指示を与える、または要求することが的確にできるが、理由や例をあげて、また

は説明をして、意見を裏付けることは部分的にしかできない。

簡単な情報を提供する、質問する、指示を与える、または要求するときは、明確で、一貫性のある、的確な文章を書くことができる。

意見について説明しようとするときは、その意見と関連のある考えやある程度の裏付けを提示することができる。このレベルにみられる一般的な弱点には、以下のようなものがある。

- ・要点の具体的な裏付けや展開が不十分である
- ・述べられている様々な要点同士の関連が不明確である
- ・文法的な誤りがある、または語彙・語句の選択が不正確である

このように、レベル7に到達した学生は、観光ガイド活動に必要な紹介文や指示内容を英語で書く場合に、的確にまとめる能力があるが、その際の裏付けや語の選択、文法という点で課題があるという評価である。ガイド活動中には、場合によっては、ツアー参加者の理解を深めるために、ハンドアウトなどの資料や行程表などのメモ書きを配付することもある。そうした際に的確な英語による文書作成ができることは、観光ガイドとして活躍する際の重要な要素となることを考慮すると、こうした書く能力のスキルアップも大切であり、観光ガイドとして求められる基準として参考になるものである。なお、一つ下の基準であるレベル6との決定的な相違点は、評価基準の冒頭分の記述における「簡単な情報を提供し、理由や例をあげて、または説明をして意見を裏付けることは部分的にはできる。」(下線は筆者による)の箇所であり、できることの範囲として、質問や指示、要求に相当する部分がレベル7の受験者と比較した際に、含まれておらず、限定的な能力として評価されていることがわかる。観光ガイドとして活動するための基準を考えると、できる限りレベル7に到達してほしいところであるが、授業や講習として学びつつスキルアップしていく過程に焦点を当てるとするならば、レベル6を一つに要件とみなすことができよう。

表4. TOEIC-SW®の結果 (n=11)

Level	P*	I&S*	Speaking	Writing
9				0
8			0	0
7			0	5
6			2	6
5			5	0
4			4	0
3	0	1	0	0
2	11	10	0	0
1	0	0	0	0

Note. P: Pronunciation, I&S: Intonation and Stress

全般的実績

観光ガイドに参加した学生の学び

本補助事業を通して、学生が学んだと思われる項目を、学生のレポートからの抜粋を紹介しつつ、2つにまとめる。

①聞き手（ツアー参加者）への配慮

主に事前講習におけるプレゼンテーションの練習と発表を通して得られた感想に、「**“相手”に伝えることを意識する大切さを学びました。**」や「**きちんと目の前の聞き手に伝えようとすること、聞き取りやすいよう大きくはっきり発音すること、読み上げにならないようにすること**」、「**ただ情報を読むだけでなく、伝えたい情報を聞いている人たちに印象付けるといふことの大切さに気付きました。**」といった「聞き手への配慮」に関する表現が見られた。いわゆる受験英語のための勉強など、「問題を解く」という形式の英語学習では、なかなか得られない気付き（noticing）を喚起する活動が観光ガイドを目的としたプレゼンテーションの練習と実践には含まれていると考えられる。英語によるプレゼンテーションそのものを目的とした課題や活動では、発表者自身の発表スタイルや英語の発音など、発表者に付随する性質を教師が評価したり、発表者自身も意識したりしがちであるが、「おもてなし」という言葉のように、相手をもてなす意味において、聞き手にとって分かりやすい表現や発音、発話速度など、聞き手の側に立った英語使用を喚起する特徴があると言える。

②地域社会に対する関心

本プロジェクトを通しての感想において、顕著に見られた記述として、「**知っているようで知らなかった地元松山のことを知り**」や「**自分自身の住んでいる町、地域というように少しずつ良いところを知っていけば良いと思います。**」、「**意外と地元のことを知らない**」といった、自分が知らないということを知ったという趣旨のメタ認知的表現があった。そしてその気付きが、地元愛媛、あるいは他県から松山に下宿している学生にとっては、自分が住んでいる町への興味・関心を喚起し、結果としてローカル・コミュニティとのかかわりを促していくと思われる。いわゆる「気付き」が、その後の学習を促進するという点で、教室内だけの学びを超えて、教室外とのかかわりの中で学びが拡張することの重要性を再確認することができたと言える。

英語力の評価

本補助事業に参加した学生の英語力は、2つの英語の試験結果からわかるように、両大学の学生の平均的な英語力よりも高い水準にある学生がほとんどであった。そのため、あえていわゆる文法解説など、英語そのものの力をつける

ための講義や語彙習得のための小テストなど、英語の授業において、一般的と思われる指導は一切行わなかった。むしろ、参加学生が現状で持っている英語力を生かして、プレゼンテーションを行ったり、観光客に見立てた留学生との会話を行ったり、実際の英語使用場面を想定したトレーニングに重点を置いた。本稿の冒頭部分でも述べたが、わが国のような英語を外国語として学ぶ環境においては、学習者はいつまでも「English Learner」であるとの認識を強く持っており、そこから「English User」への転換がなかなか図られないというジレンマが生じる。そうしたジレンマへの対処は、やはり学んだ英語の使用場面を強く意識できる学習環境の設定であり、テストのみで測定される英語力とは異なる実践的英語力を、講習を重ねるごとに身につけていったのではないだろうか。

波及効果

本事業が終了した年度の翌年度（平成29年度）において、第31回宇宙技術及び科学の国際シンポジウム（International Symposium on Space Technology and Science: ISTS2017）という国際学会に、今回の取り組みに参加した学生が、地域の観光資源を紹介する学生ボランティアガイドに選ばれた。内容としては、工学部機械工学科の教員との協働プロジェクトとして、世界30カ国からの研究者が集う国際会議（会場：ひめぎんホール）に参加し、松山城ガイドや道後温泉周辺ガイドの他、日本文化の紹介コーナーにおいては、折り紙やけん玉の実演など、英語を使った活動を行った（図7と図8を参照）。前年度のガイド実践と併せて、2度にわたる国際会議での実践経験を踏まえ、英語使用のみならず、松山市の観光資源に対する理解とその周知の重要性を、身をもって知ることができたのではないと思われる。

まとめと今後の課題・発展

本報告では、平成28年度「愛媛大学と松山大学との地域



図7. 学会会場内の観光ボランティアのデスク



図8. けん玉を一緒に楽しむ様子

活性化促進連携事業」に採択された事業として、両大学の学生が英語による学生ボランティアとして活動できるようになるまでに、どのような講習を受講し、実際にガイド活動を行い、そして、その経験がどのような学びにつながったのかということについてまとめた。

単に検定試験のような問題を解くことができるというような限定的な英語力を超えて、学生が「英語使用者(English User)」として、自分自身を意識できるようなコンテキストの設定が、高等教育における英語の授業形態には必要な改革ではないだろうか。

一般的実績にも記述したが、観光ガイド実践に参加した学生の2つの学びのような、相手(聞き手)への配慮や地域社会への関心など、英語学習の枠を超えて、その学びが拡張するようなプログラムが必要なのであり、教室内の英語学習のような閉じた環境で、語彙数も、他人とのコミュニケーションの接点(node)も、コンパクトにまとまる環境下での英語力の育成では、実社会では使い物にならないのではないだろうか。

今後の課題として、今回の経験と知見を踏まえ、高等教育における、学習者が「英語を学ぶ」という意識を超えて、学習者自身が「英語を使用している」という事を意識できる英語科目の企画・開発を検討する必要があるだろう。なお、現在、本事業の発展的取り組みとして、両大学共同で開講する科目として「地域観光英語(仮称)」の創設に関する協議を行っている。特徴として、在学中に使用できる名称として「学生ボランティアガイド(英語)」の付与の他、地域の観光資源の理解と高度な英語運用能力の涵養を目的としている。英語を学ぶプロセスは大切なことであるが、それを使用する姿(使用者像)を、学習者自ら明確に想像できなければ、現状と未来の姿に差異を見出すことができず、身につけるべきスキルとその学習について見通しが立たないであろう。今後、このようなプロジェクト型の英語の授業が一層取り入れられるよう検討したい。

注1)外国人が我が国に訪れてくる旅行を意味する。なお、

これに対し、自国から外国へ出かける旅行をアウトバウンドと称する。

付記

本稿は、JACET中国四国支部春季研究大会(平成29年6月3日 於 岡山大学)にて発表したスライドに加筆・修正し、論文としてまとめたものである。

謝辞

本事業の実施にあたり、「平成28年度愛媛大学と松山大学との地域活性化促進連携事業」として助成を受けた。ここにあらためて感謝の意を表す。また、本事業の成果に対して、両大学が実施した報告会において、「学長賞」を受賞した。ひとえに、参加した学生の素晴らしい活動の証と言える。さらに、ISTS2017への参加に際し、第31回ISTS愛媛・松山大会地元事業実行委員会(松山市役所企画戦略課)から「企画内容の周知」の支援として、事業支援を受けたことを申し添える。

引用文献

- 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会「能力レベル別評価の一覧表」 <http://www.iibc-global.org/toeic/test/sw/guide04/score01/descriptor.html> Retrieved on 28th September, 2017
- 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会「平均スコア・スコア分布 詳細(2017年3月5日)」URL: http://www.iibc-global.org/toeic/official_data/speaking/data_avelist/s_20170305.html#anchor01 Retrieved on 28th September, 2017
- 中山晃(2013)。「4技能の統合プロセスを追う:愛媛大学「英語プロフェッショナル養成コース」を事例として」『大学英語教育学会 中国・四国支部紀要』第10号, 80-91。(シンポジウム特集論文)